

No	提 案 名	提案団体名	
		代表者氏名	所 属
3	大谷石集落における町並みの保全修景と地域再生プロジェクト	宇都宮大学 安森亮雄研究室A	
		稲川 芽衣	宇都宮大学大学院 工学研究科
		指導教官氏 名	安森 亮雄

1 提案の要旨

宇都宮市の中心市街地から北西に約 10km に位置する徳次郎町西根地区には大谷石^{注1)}や徳次郎石の凝灰岩を用いた建物が多く現存しており、特徴的な町並みが形成されている。しかし、近年では使用機会が減ったことや所有者の世代交代により、こうした大谷石建物が取り壊されることも出てきた。また、西根では高齢化が進み、コミュニティの持続、集落としての存続が危ぶまれている。

コミュニティを持続させていくための集落の活性化、さらに、大谷石集落の貴重な風景を残していくために、地域再生に向けた保全修景の提案を行う。

徳次郎石とは

大谷石と同じ凝灰岩で、徳次郎町付近から産出される。大谷石に比べ色が白い。「ミソ」と呼ばれる穴が少ないため、細かな彫刻に向いている。

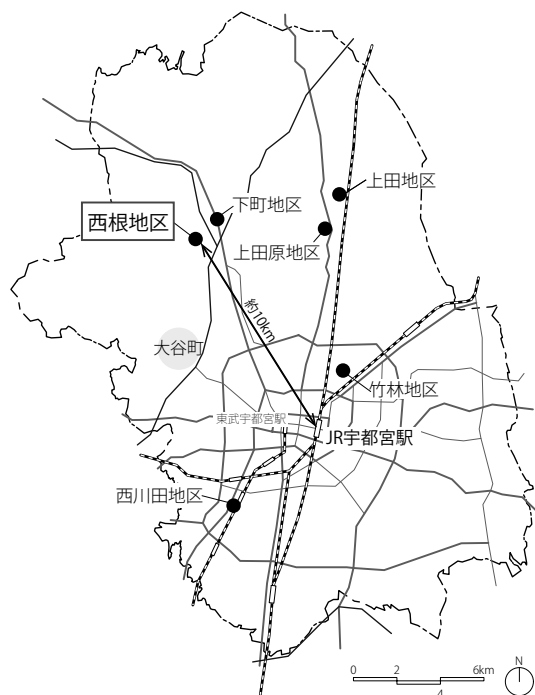


図1 宇都宮市内の大谷石建物の残る地区

2 提案の目標

①西根地区の活性化

- ・西根地区の魅力発信
- ・若者を呼び込む

②大谷石集落の町並み保全修景

- ・大谷石建物の活用
- ・町並みの修景



図2 西根地区の町並み

西根地区からの人の流出を食い止め、若者を呼び込むことで集落を活性化する。まず始めに認知度を高めるため、西根には大谷石建物の並ぶ素晴らしい町並みが残っているという情報発信を行う。また、現在利用されていない大谷石建物を活用するために、現代の生活に合った利用方法を提案する。

注1) 宇都宮市付近で産出される凝灰岩は産地によって大谷石や徳次郎石などの呼び名があるが、本提案では総称して大谷石と呼ぶ。

3 現状の分析と課題

3-1 宇都宮市における西根の立地

西根地区は西側には男抱山、東側には田畑、日光街道の杉並木が広がる自然豊かな地域である（図 3）。また、東北自動車道の宇都宮 IC が近く、自動車交通が便利である。すぐ南西には道の駅ろまんちっく村があり、西根の住民の方も、農作物の販売などを行っている。

大谷石の産地である大谷町とは 5km ほど離れている。大谷町では、石の採掘が大規模に行われており、大谷石の産業の中心となっている。一方、西根は石でできた母屋や、繊細な彫刻の施された大谷石蔵など、小規模ながらも生活の中に石が馴染んだ集落である。



図 3 宇都宮市における西根の立地

3-2 徳次郎町の歴史

3-2-1 徳次郎六ヶ郷

徳次郎町は日光街道沿線の上町、中町、下町、半蔵山の山裾に位置する門前、田中、西根の 6 地区からなり、徳次郎六ヶ郷と呼ばれている。江戸時代には日光街道 18 番目の宿場町として栄えた（図 4）。

3-2-2 西根と徳次郎石

かつては農林業地域であり、背後の男抱山から徳次郎石が産出されることから、農間渡世として採石や石工に従事する者が多かった。また、この地域では古くから火事が多く、火災から家財を守るために、石造の建物が多く建てられた（表 1）。



図 4 日光街道

表 1 徳次郎町歴史年表

時代	歴史	交通	徳次郎石の利用
奈良	778 年 久次良一族が日光山神社から御神体を千勝の森に遷座し、勢力を拡張		
江戸	1615 年 日光街道 開通 日光街道 18 番目の宿場町、徳次郎宿として繁栄	かご	江戸初期 墓石等に用いる 元禄 鳥居・門柱等に用いられる 文化～江戸末期 徳次郎石の利用最盛期 嘉永 石蔵の建造が始まる
明治	1889 年 (M22) 日光線 開通 1890 年 (M23) 町村制 施行 合併により、河内郡富屋村を形成。大字 徳次郎となる 1897 年 中徳次郎で火災 十数件を全焼	人力車 馬による輸送 1904 年 (M37 年) 軌道 敷設 宇都宮市材木町ー上徳次郎 馬車	張石が主流 (江戸～明治) 石屋根の最盛期 (江戸末期～明治初期)
大正	1926 年 下徳次郎で火災 6 軒全焼	1923 年 (T12 年) 乗合自動車 開通 城山自動車 開通	
昭和	1930 年頃 上徳次郎で火災 5,6 軒全焼 1954 年 (S29) 町村合併促進法 施行 宇都宮市徳次郎町となる	1954 年 (S29 年) ガソリン式軌道の普及 関東バス	積石の普及
平成			1990 年 (H2) 徳次郎石の採掘中止

3-3 大谷石建物について

3-3-1 大谷石建物の構成

西根地区の大谷石建物を用途、階数、構法で整理すると、次の6つの類型に分けることができた。

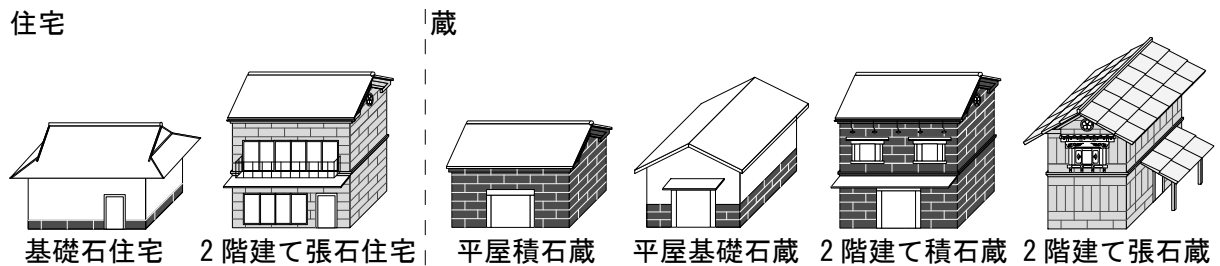


図5 大谷石建物の類型構成

張石（江戸末期～大正初期）：板蔵を火から守るために発達したもので、木造の軸組みに鉄釘で石を張り付けている。石を縦に張る縦横張りの目地は、張石蔵にしか見られない。

積石（明治後期～）：石を積んで構造としている。交通の発達とともに、大きいサイズの石を運ぶことが可能となり普及した。



図6 縦横張りの張石蔵

3-3-2 大谷石建物の並ぶ町並み

街道の東側中央部には華やかな装飾の多い2階建て張石蔵が街道沿いに集中し、さらに石塀と一体化して建つ蔵も多いことから、大谷石の連続したファサードが形成され、西根の町並みの中心となっている。街道の西側中央部は、街道沿いから敷地の奥まで大谷石建物が建つ。さらに奥には祠や鳥居があり、山へと連続していく奥行きのある町並みとなっている。

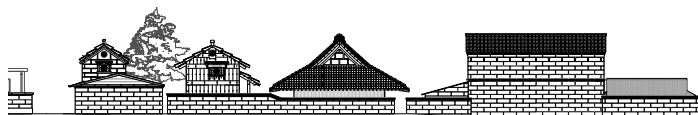


図7 街道東中央部〈石瓦や装飾の多い蔵と、塀が一体化した蔵が連続する町並み〉

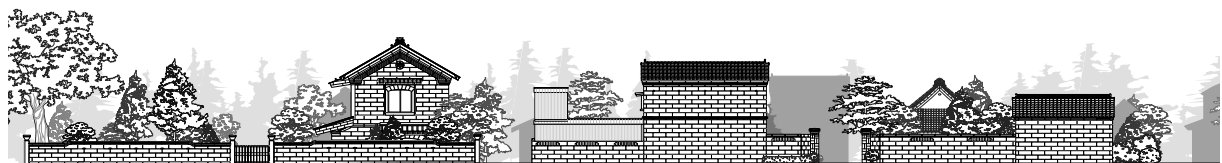


図8 街道西中央部〈奥行きのある町並み〉

3-3-3 彫刻屋台と大谷石建物の彫刻

徳次郎六ヶ郷にはそれぞれの地区で1台ずつ彫刻屋台を保有している。智賀都神社夏祭りの際には、6台の彫刻屋台が日光街道沿いに位置する智賀都神社に繰り込まれる。西根の彫刻屋台には唐獅子や菊の花など、豪華で繊細な彫刻が施されている。しかし、普段は屋台蔵に収納されているため、目にすることはできない。

西根の大谷石建物は、窓に彫刻が施されているものが多く見られる。古くは石仏や祠を作っていたことから、石の彫刻技術があった。さらに、豪華で繊細な彫刻屋台の伝統も伺うことができる。このような石工の技術と伝統、そしてミソが少ないという徳次郎石の特徴が、西根の大谷石建物の窓の彫刻を生み出している。また、彫刻によって時代の移り変わりを見て取ることができる。

・木造の構造を模した彫刻

張石蔵等、比較的時代の古い蔵に多く見られる。庇の上面は瓦、下面は垂木や軒桁を模した形に掘り出されている。まぐさや石戸には吉兆図が彫刻されており、窓から福が舞い込むようにという願いが込められている。

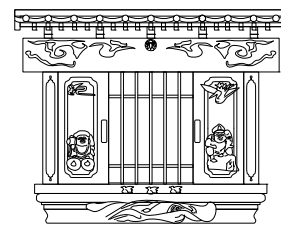


図 9 和風の彫刻

・擬洋風の彫刻

昭和時代になると洋風の建築様式が浸透し、柱頭や基壇を有する擬洋風の柱の彫刻がされるようになる。

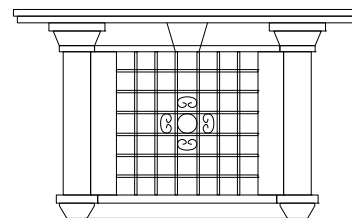


図 10 擬洋風の彫刻

3-4 住民へのヒアリング調査

西根地区の現況を把握するために、大谷石建物のある敷地にお住まいの方を対象に、現在の生活環境の満足度と大谷石建物の使用状況についてヒアリング調査を行った。

調査対象：大谷石建物のある 22 敷地中、公民館や空家を除く 17 世帯

3-4-1 家族構成

17 世帯中、約半数にあたる 9 世帯が 50 代以上のみで構成されていた（表 2）。5 世帯は子ども世帯が西根から離れて暮らしていた。また、50 代以上で未婚の方も 3 名おり、地域の跡継ぎが減少していることがわかる。

表 2 年代別家族構成

表 2 年代別家族構成				17 世帯
家族の年代				世帯数
70代以上	+	50～60代		3
		50～60代		6
70代以上	+	50～60代	+ 20代	3
		50～60代	+ 20代	2
		50～60代	+ 30～40代 + 20未満	1
		50～60代	+ 20代 + 20未満	1
			30～40代 + 20未満	1

3-4-2 50 ～ 60 代の職業

50 ～ 60 代では農業を行っているのが 11 世帯と多数を占めた。現在農業を行っている家は、農業を辞めた家から農地を預かり、複数の農地で行っていた（表 3）。

20 ～ 40 代は市街地の方に勤めている方が多く、農業を継いでいるのは、1 世帯のみだった。農業が衰退傾向にあることいえる。

表 3 50 ～ 60 代の職業

職業	場所	17 世帯 世帯数
農業	西根	11
農業以外（大工等）	西根	2
農業以外（サラリーマン）	宇都宮市内勤務	4

3-4-3 生活環境の満足度

西根での生活環境について、日常生活・仕事・子育て・老後の生活の4つの項目で満足度を調査した。

表4 生活環境の満足度

	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	その他
日常生活	9	1	2	0	1	2
仕事	9	0	2	0	0	4
子育て	7	1	2	1	0	4
老後の生活	10	1	1	0	0	3

主な意見

【日常生活】交通の便がよい / 車を使えばすぐ街まで行ける（15分程度） / ICが近い

【仕事】静かでよい / 地理がよい

【子育て】学校、幼稚園が近い / 空気もよく環境はよい / 奥さんが育てたのでわからない

【老後の生活】病院や介護施設が近くにたくさんある / 老人ホームなどは迎えにもきてくれる

静かな環境でよい / 子供がどれだけ面倒を見てくれるかどうかなので、環境ではない

生活環境の満足度は全体的に高い。西根地区の東側約300mに山王団地があり、病院や幼稚園が充実しているためこのような結果が得られたと考えられる。また、不便さを感じた若い世帯は他の地域に移り住み、十分に満足している方が住み続けているということも考えられる。

3-4-4 西根の魅力と問題点

西根地区の魅力、問題点だと思うところを自由回答で聞いた。

■西根の魅力は何ですか？

- ・自然環境（5）
- ・地域コミュニティ（4）
- ・特にない（1）
- ・その他（1）

■西根地区の問題点は何ですか？

- ・嫁、婿が来ない（2）
- ・子どもがいない
- ・西根団地に住む新たな住民との関わり
- ・家が建たない
- ・スーパーが少し遠い
- ・特にない（4）

自然環境や人の良さを魅力だと感じている住民が多かった。しかし、地元の住民は大谷石を魅力だと認識していないことがわかった。また、「嫁、婿が来ない」や「子どもがいない」のように、集落の将来を危ぶむ声も聞かれた。

3-4-5 大谷石建物の使用状況と保存の意思

現在大谷石建物をどのように使用しているのか調査した。蔵は使用されている場合は1階を米の貯蔵庫として使っており、2階はおばあちゃんの嫁入り道具や、冠婚葬祭用の家財道具などが収納されていた。納屋は、農家では農機具倉庫、その他のお宅では使わないものをしまっておく倉庫としていた。しかし、所有者に大谷石建物を使っているという意識はほとんどなかった。壊すのにもお金がかかるため、そのままにしているという意見が多かった。

3-5 西根地区まちづくりワークショップ

西根の魅力を発見・再確認し、今後のビジョンを考えるために、まちづくりワークショップを行った。

日 程：2014年9月6日（土）

参加者：西根地区住民（3名）、宇都宮大学学生（9名）、その他（5名） 計17名

内 容：町並み見学、魅力マップの作成

・町並み見学

3つのグループに分かれて町並みを見学し、魅力だと感じたところを写真やイラストに残した。

・魅力マップの作成

町並み見学の後、どのようなところが魅力的だったかを話し合った。魅力ポイントを各グループごとにポストイットに書き出し、写真とともに1枚の大きな地図に貼り出した。また、魅力だけでなく、もっとこうだったらいいのにな、という提案も同時に書いてもらった。



図 11 町並み見学



図 12 魅力を書き出す



図 13 完成した魅力マップ

ワークショップで挙げられた魅力ポイントをまとめた（図 14）。細かく華やかな彫刻が施されている、色が変わっているなど特徴のある特定の大谷石建物に意見が集中した。建物以外にもポンプ小屋や土留め、石塀など大谷石を利用しているところも意見に挙がった。また、町並みについては、現在は蓋がされ、暗渠化している水路を活用してはどうかという意見が多数見られた。

大谷石について		町並みについて	
大谷石建物の意匠 開口の彫刻・家紋・屋号	建物以外の大谷石の利用 ・ポンプ小屋 ・土留め	道の折れ曲がり	水路
 蝶の家紋			
石の魅力 	石塀も含めた大谷石建物の連続	裏道もおもしろい 	蓋がされている
変わった色の石 			

図 14 ワークショップのまとめ

4 施策事業の提案

4-1 大谷石建物を活用した地域再生

宇都宮市民でも、西根の石の町並みを知っている人は少ない。宇都宮の地域資源である大谷石の魅力、歴史と伝統がぎゅっと詰まった西根地区をより多くの人に認知してもらい、残していくために情報発信を行う。

現在、大谷石研究会や宇都宮市が主催する大谷石建物を巡るバスツアーのコースに西根地区も含まれている。しかし、訪れる人を受け入れる体制ができていないため、西根の歴史や伝統は十分に伝わっていないのではないだろうか。さらに、住民間のコミュニケーションの場、新たな住民の定住の場、そして大谷石建物の担い手の確保として次の5つを提案する。

- ◆ろまんちっく村を拠点とした徳次郎のまちづくり
- ◆西根まちあるきマップの作成
- ◆設計提案① 情報センター
- ◆設計提案② 交流カフェ
- ◆設計提案③ 大谷石建物を利用した住宅兼アトリエ

4-2 西根の周辺地域を含めたまちづくり

西根地区から北西に約700mのところの道の駅ろまんちっく村がある。多くの人で賑わうろまんちっく村と提携した企画を行うことで、西根の魅力を多くの人に伝える。

・レンタサイクル駅の設置

西根の周辺には、魅力的なスポットがたくさんある。ろまんちっく村でレンタルサイクルを行うことで、これらの場所を回れるようにする。自転車を使うことで、排気ガスや路上駐車による環境悪化を防ぐこともできる。

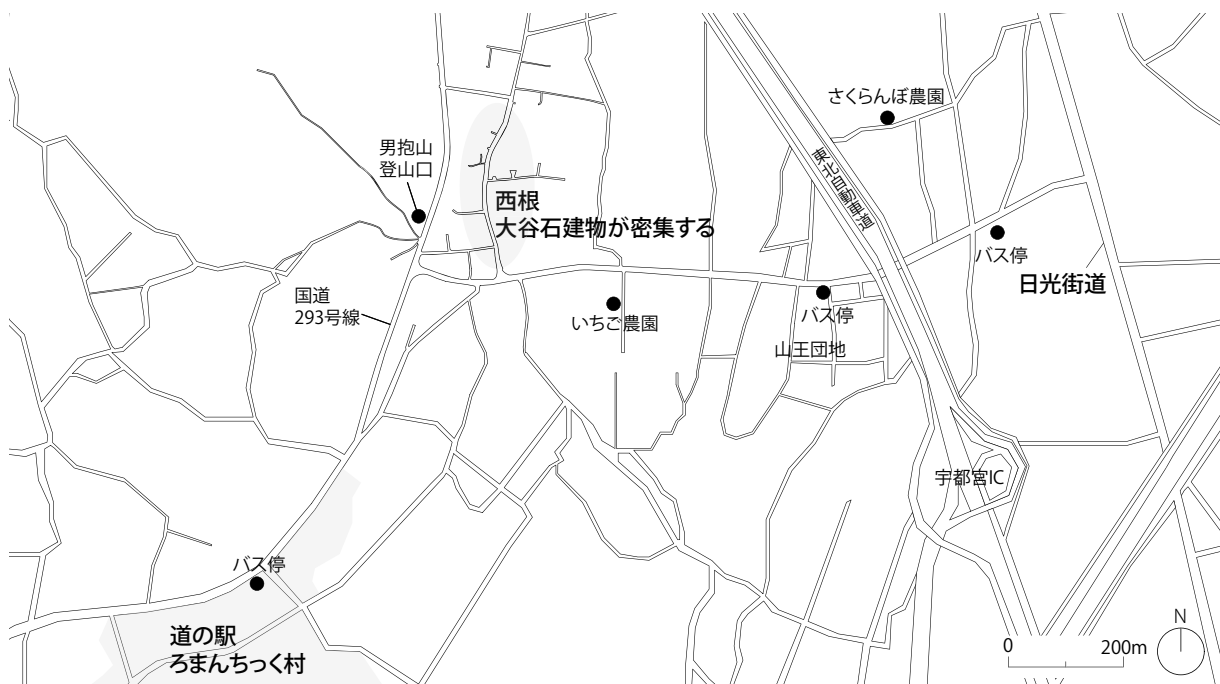
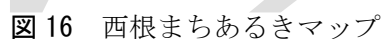


図15 西根周辺の魅力

西根に見学を訪れた人が、より深く大谷石の町並みを楽しめるようなマップを提案する。大谷石建物についての知識が全くない人でも、見るべきポイントがわかるよう、豆知識を盛り込んだ。



4-4 計画地

街道の南側から訪れた人はまず情報センターに立ち寄る。ここでまちあるきマップを始めとする西根の歴史や大谷石建物に関する情報を手に入れる。そして、中央部の大谷石建物が特に密集する町並みを楽しみながら、最後に交流カフェへと行く。国道293号線に抜けることもでき、街道を引き返して町並みをもう一度見ることも可能である（図17）。

4-5 交流カフェ

明治10年に建てられた張石蔵が奥にある広い空地を活用する。住民同士、また、住民と訪問者の交流できるカフェを設計する（図18）。

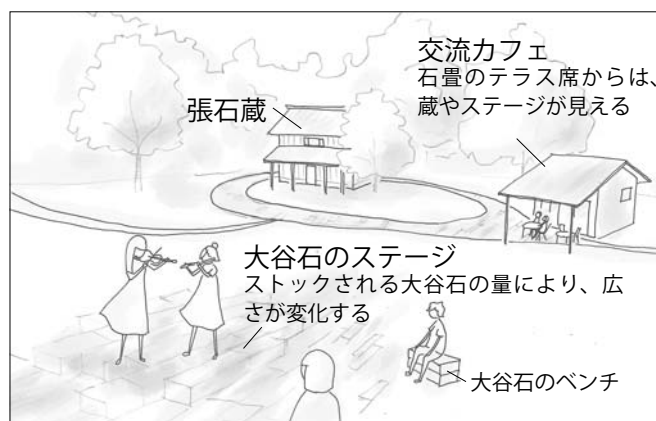


図18 集められた大谷石のステージで演奏会

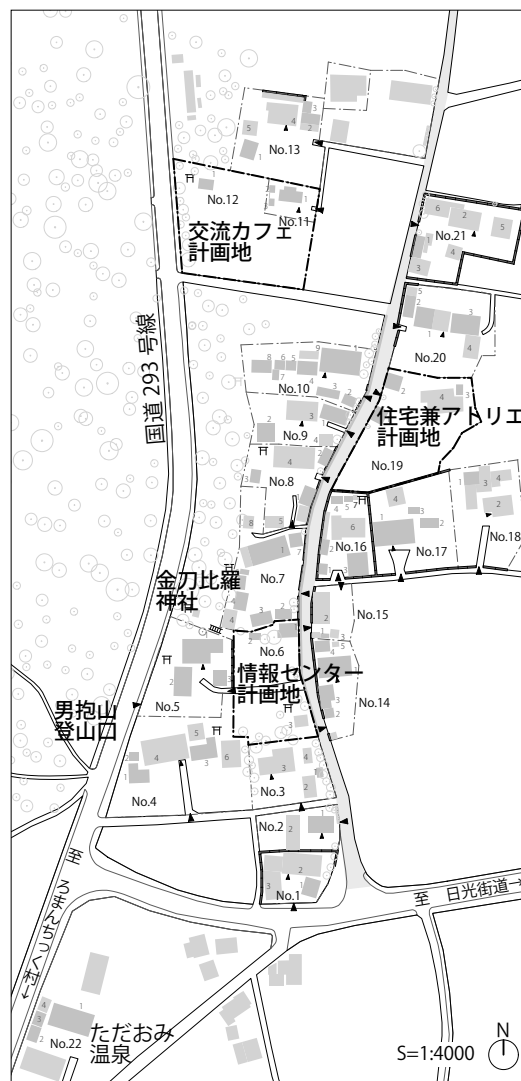


図17 計画地



図19 交流カフェのある大谷石ストックヤード

4-6 情報センター

公民館と屋台蔵を一体化し、情報センターを計画する。現在、彫刻屋台は屋台蔵の中に収納されており、見学することはできない。そこで、西根を訪れる人がいつでも屋台彫刻を見学でき、さらに西根の歴史や蔵の解説などの情報が得られる情報センターを計画する。また、計画地の西側には金刀比羅神社がある。そこで、情報センターが神社へのアプローチにもなるようにする。



図 20 情報センター

4-7 住宅兼アトリエ

若者が定住する場所として、大谷石建物を活用した住宅兼アトリエを提案する。広い間口を活かして1階と下屋部分を一体的に使い作業場とする。下屋で作業場をすることで、地元住民や道を行く人との交流が生まれる。また、吹き抜けをつくることで、既存の開口部からの採光を最大限に活かす。



図 21 既存大谷石建物

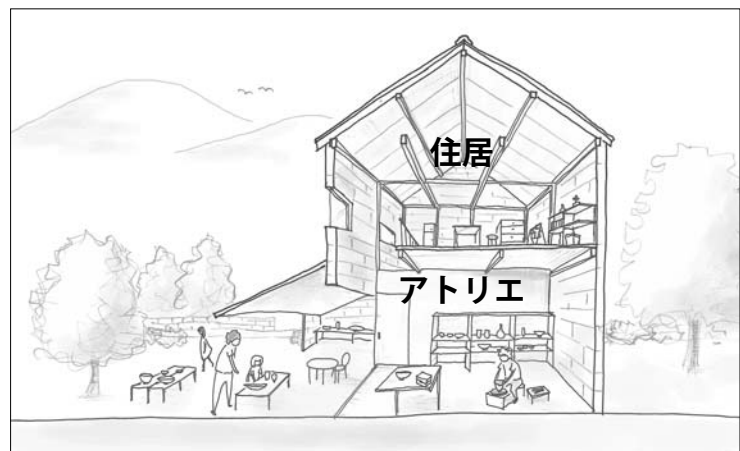


図 22 陶芸工房のある住宅

5 まとめ

本提案では、西根地区の魅力発信方法と現代に合った大谷石建物の活用方法を示した。西根の魅力に共感した新規の住民は、大谷石建物の維持・管理の担い手となり、地域再生のきっかけとなるだろう。まずは、西根地区の魅力をより多くの人々に認識してもらい、保存への動きが高まることを期待する。

参考文献

池田貞夫，徳次郎の彫刻屋台，池田貞夫，1983

上村克郎，小西正敏，橘高義典，中村幸蔵，石造構法に関する研究－凝灰岩を用いた石屋根構法－，日本建築学会大会学術講演梗概集 p735-736, 1988

福田操，富屋村史，栃木新聞社，1962